

教職課程
自己点検評価報告書

令和5年3月

東京農業大学生物産業学部

目次

I	教職課程の現況及び特色	1
II	基準領域ごとの事例点検評価	3
	基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み	3
	基準領域2 学生の確保・育成・キャリア支援	5
	基準領域3 適切な教職課程カリキュラム	7
III	「教職課程自己点検評価報告書」作成のプロセス	10
IV	現状基礎データ票	11

I 教職課程の現況及び特色

1 現況

(1) 大学名：東京農業大学 生物産業学部

(2) 所在地：北海道網走市八坂 196

(3) 学生数及び教員数（令和4年5月1日現在）

学生数：教職課程履修者数 115 名／学部全体 1,460 名

教員数：教職課程科目（教職・教科計）担当 54 名／学部全体 58 名

2 特色

本学部は、人類生存の基である生物産業に関わる生産、加工、流通、経営を取り巻く自然科学的・社会経済的現象を教育研究の対象とした生物産業学を基盤として文理融合の教育体系のもとで、生命・食料・資源・環境問題に関する深い知識を持ち、その解決方向を示すことの出来る地域社会・国際社会に貢献しうる人材を養成する。

本学部を構成する学科と認定されている免許教科は下表のとおりである。

学科	中学校教諭一種免許状	高等学校教諭一種免許状
北方圏農学科	—	農 業
海洋水産学科	理 科	理 科
食香粧化学科	理 科	理 科
自然資源経営学科	社 会	公 民

上記の免許状取得のため教職課程では、教育意欲に溢れ、理科、農業、社会及び公民に関する専門知識を持ち、学校現場に対応できる実践的指導力を身につけた教員の養成を、全学的な協力・指導体制のもと各学科で行っている。

各学科の教職課程の理念等

○北方圏農学科

本学科は、本学の理念である「実学」の精神を授業に取り入れ、現場に強い農業教員の養成に力を入れている。すなわち、農業高校における座学の講義だけでなく、実験実習、学校及び農場の維持管理作業、生徒指導、課外活動まで、主体的・実践的に指導できる農業教員の養成に努めている。さらに昨今の教育課題である「心の教育」やいじめ、引きこもりなどの人間関係に起因する諸問題に対して、本学科の特色を活かして適切に対応できる教員、「食育」などを含めた総合的な学習の時間や環境教育の指導に意欲的に取り組む教員、体験不足や理科離れの解消に向けて勤務校だけでなく広く地域に向けて努力する教員の育成を目指している。

○海洋水産学科

本学科は、本学の教育理念である「実学」の精神を授業に取り入れ、中等教育の理科の授業実践及び観察・実験を指導でき、生徒に科学的思考を教授することのできる理科教員の養成に努めている。さらに昨今の教育問題である「心の教育」やいじめ、引きこもりな

ど人間関係に起因する諸問題に学科の特色を活かし、適切に対応できる教員、総合的な学習の時間や環境教育の指導に意欲的に取り組む教員、理科離れの解消に向けて努力する教員、生徒を指導する教育者としての高い意識を持つ教員の育成を目指している。

○食香粧化学科

本学科は、本学の教育理念である「実学」の精神を授業に取り入れ、中等教育の理科の授業実践及び観察・実験を指導でき、生徒に科学的思考を教授することのできる理科教員の養成努めている。さらに昨今の教育問題である「心の教育」やいじめ、引きこもりなど人間関係に起因する諸問題に学科の特色を活かしながら臨機応変に対応できる教員、様々な生活体験不足や理科離れの解消に向けて努力する教員の育成を目指している。

○自然資源経営学科

本学科は、農林水産業、食品加工業、自然を活かした観光業、環境ビジネスなど地域産業を支える経営を実践するための経営学理念を修得するとともに、生物産業を中心とした経営体の持続的発展、産業間連携の支援を通じて地域産業の再生・活性化・創造に貢献し、オホーツクの地と産業というフィールドの中で地域産業の担い手たる人材を養成するため、次のことを教育目標として掲げている。第一に、広義の農学である「生物産業学」を基盤とした自然資源経営学における専門知識と技術を有する者、第二に、専門家としての責任を自覚し、実学主義のもと問題解決能力と意欲を有する者、第三に、適切なコミュニケーション及びプレゼンテーション能力を有し社会貢献ができる者、以上の3点である。こうした本学科の育成像を体現し、中等教育を担う社会及び公民の教員養成に重きを置くものである。

II 基準領域ごとの教職課程自己点検評価

■基準領域1 教職課程に関わる教職員の共通理解に基づく協働的な取り組み

[現状説明]

(1) 基準項目1-1 教職課程教育の目的・目標の共有

初代学長横井時敬による本学の建学の精神「人物を畑に還す」との言葉どおり、本学は開学以来全国から若者を集め、地域に貢献する人物となるよう教育してきた。教員養成においても同様で、課程履修学生が卒業後に全国各地で教育者として活躍することを目標とし、この東京農大精神と教育理念「実学主義」のもと、豊かで実践的な知識と技能を身につけた心身ともに健全な教員の養成を目指している。今日の生命科学は進歩が速く、農学や環境科学には社会からの期待が大きい。本学部ではこのような動向を踏まえ、学科の基礎と教員としての基本的かつ実践的な知識と技術を習得させる教育を行う。

上記の教職課程教育の目的・目標と科及び取得できる免許を情報公開するとともに、学生には「学生生活ハンドブック」やガイダンスで周知するとともに、関係教職員には学科等教員会において共有を図っている。

<根拠となる資料・データ等>

- 1-1-1 東京農業大学 HP「教職課程に関する情報公開」
(<https://www.nodai.ac.jp/academics/edu/disclosure/>)
- 1-1-2 学生生活ハンドブック2022
(<https://www.nodai.ac.jp/campus/e-books/HB/>)
- 1-1-3 2022年度教職課程ガイダンス資料

(2) 基準項目1-2 教職課程に関する組織的工夫

本学では、全学的に教職課程を運営する組織として、教職・学術情報課程主任（以下 課程主任）、教職課程所属の教員（以下 課程教員）、6学部23学科のうち各学科から選出された教員各1名、事務局長、教務支援部長、幹事3名（3キャンパスの教職・学術情報課程業務担当課長各1名）から構成される教職・学術情報課程委員会を設置している。委員会は年2回行い、課程履修学生に対する教育及びカリキュラム編成に関する事項について、各学科と教職課程との連携調整を図ることを目的としている。また、必要に応じて教職課程委員会（部門連絡会）を開催し、特定学科に関連する連絡調整を行っている。本学部からも各学科1名が委員に選出され、教職課程の運営を担っている。

教職課程では、教育に関する事項を審議することを目的として、課程主任、課程所属の教授、教務支援部長で構成される教職課程教授会を必要に応じて開催している。その他に本学部教職課程では、教職教員、学生教務課長、学生教務課担当者で構成される課程教員会を必要に応じて開催し、課程の運営について審議、調整を行っている。

本学部教職課程の運営は、課程主任のもと課程教員が担当学科の課程履修学生の担任となり、学生教務課と役割分担で連携を密に行い、協働体制で行っている。また、課程履修

学生に対する指導は、教職に関する科目及び教育実習視察は課程教員が原則行い、教科に関する科目は学科教員が行う。また、学科教員による研究室でのキャリア支援など全学的な取り組みを行う中で、教職課程と学科間の協働による教育体制が図られている。なお、教職課程の取り組みなどに関する情報公開は、毎年度発行する「東京農業大学教職課程 Annual Report」や本学ホームページで行っている。

<根拠となる資料・データ等>

- 1-2-1 東京農業大学教職・学術情報課程委員会細則
- 1-2-2 東京農業大学教職課程 Annual Report 令和4年度版
(<https://www.nodai.ac.jp/news/article/2annual-report-1/>)
- 1-2-3 東京農業大学 HP「教職課程に関する情報公開」
(<https://www.nodai.ac.jp/academics/edu/disclosure/>)

[長所・特色]

教職課程 FD・SD、東京農業大学教職課程 Annual Report 発行、部門連絡会、課程教員と学生教務課による情報交換・検討など課程履修学生に対する指導や個別対応を連携して行う全学的対応・体制・環境を整えている。また、本学部教職課程は規模が小さいが故に職員と学生の距離が近く、きめ細かい指導ができる強みを活かした課程運営を行っている。

[取り組み上の課題]

教職課程の運営に関して、世田谷及び厚木キャンパスの教職課程と本学部教職課程との連携が課題である。また、社会性や道徳性、教科や学科の専門性といった教員の資質の向上を目的として積極的に連携を行い、教職課程の更なる強化を進める必要がある。

現在、課程履修学生に丁寧な教育を充実させるため、これまで以上に各学科と教職課程の連携が必要と考え、連携強化の方法など検討を行っている。

■基準領域2 学生の確保・指導・キャリア支援

[現状説明]

(1) 基準項目2-1 教職を担うべき適切な人材(学生)の確保・育成

基準項目1-1で示した各学科が目指す教員像に向け、1年次のガイダンスを通じて教職課程を学ぶにふさわしい学生像を周知している。教職課程では2年次に「履修カルテ」を配付し、課程履修学生は教育実習指導を通じて課程教員の面談を受け、履修カルテを作成することで課題確認を行っている。なお、本学では3年生修了時点までに、教職概論、教育原理、教育課程論、教育心理学、生徒進路指導論の単位を修得することを教育実習派遣要件に定め、教職課程の基礎を修得した課程履修学生を教育実習に派遣することとしている。

<根拠となる資料・データ等>

2-1-1 履修カルテ

2-1-2 教職課程履修案内2022

(2) 基準項目2-2 教職へのキャリア支援

本学部では担任制を導入し、各担任が学生に対して手厚いキャリア支援を行っている。3年次以降は全学生が研究室に所属するため、各担任は研究室活動を通じて学生のニーズや適性を把握し、キャリア支援を組織的に行っている。

キャリアセンター事務課では、3年次に全学生と個人面談を行い、進路希望の確認、就職活動及び試験対策に関するアドバイスを行っている。教員免許取得志望者には、就職情報として中学校及び高等学校からキャリアセンター事務課に臨時教員募集の連絡があった場合は、課程教員を通じて課程履修学生に周知している。

教職課程では、課程履修学生に対して、希望に応じて非常勤講師とも連携して個人面談を複数教員で実施している。また、教員採用試験対策講座及び外部機関提供の全国模擬試験を定期的の実施し、筆記・実技試験及び個別・集団面接の指導実施している。

○北方圏農学科

本学科では、本学部OBの現役教員との連携に積極的に取り組んでいる。農業高校で活躍している本学OBの現役教員の依頼により、学科教員が農業クラブの発表練習に参加するほか、本学部OBの現役教員が教職課程の講義を担当している。また、既に教員免許を取得済の大学院生が近隣の高校において時間講師として勤務経験を積んでいる等の事例もある。

○海洋水産学科・食香粧化学科

両学科では、理科及び理科の指導法に関する科目と研究室活動の中で、意見交換とアンケートの時間を取り、課程履修学生の意欲や適性を常時把握するよう努めている。また、

本学部 OB の現役教員がゲストスピーカーとして教科に関する科目に参画し、積極的にアドバイスをを行っている。

○自然資源経営学科

本学科では、学校現場における様々な世代への対応の必要性から、1年次から演習科目を通じて、教員、先輩・後輩及び卒業生などとの関わりのなかで人間力とコミュニケーション能力を高める指導を行っている。

<根拠となる資料・データ等>

2-2-1 2022年度学部・学科・課程紹介

2-2-2 東京農業大学教職課程 Annual Report 令和4年度

(<https://www.nodai.ac.jp/news/article/2annual-report-1/>)

[長所・特色]

個別面談を通じて、学生1人1人のキャリア発達を支援し、本人の特性に応じたキャリアを教員とともに考え、支える場を設けている。

[取り組み上の課題]

質保証・向上を目的とした課程履修学生の評価基準の設定が課題である。教職課程の履修を希望する学生が履修するにあたり、最低限の知識・技能を有しているかを確認すること、教員としての質を担保するために履修条件としての評価基準を定めることを検討している。また、将来教員を志望する意欲のある学生に対して、キャリアセンター事務課と連携し、就職支援に関わる情報の提供と共有を行うことで効果的な就職支援を実現する。

■基準領域3 適切な教職課程カリキュラム

[現状説明]

(1) 基準項目3-1 教職課程カリキュラムの編成・実施

研究室における実験を中心とする諸活動と学会発表のような体験的・実践的な活動及び卒論研究を通して、科学的なものの見方・考え方を養い、問題解決能力を育成している育成している。学生の研究においてはICT機器を活用して情報活用能力を育成している。また、模擬授業形式のプレゼンテーション演習による反転学習並びにディスカッションを多く取り入れ、教育実習を実りあるものとするよう指導を行っている。

課程教員は、教職課程の質的水準に寄与するコアカリキュラムを、履修カルテの内容を踏まえて系統的・体系的なカリキュラムとなるよう編成している。授業はシラバスに基づき到達目標の達成ができるよう授業を設計し、学科内の教務委員会でシラバスの内容をチェックする。課程履修学生には、コアカリキュラム及び教員等育成指標の内容を踏まえて、1年生の段階から教員としての資質を見極める機会や体験を提供し、学び続ける教員像の確立、実践的指導力の育成を意識して様々な取り組みを実施している。

○北方圏農学科

本学科では、アクティブラーニング、グループワーク等を取り入れた事例として、計量生物学において、パソコンを使用した統計解析スキルを身につけるために、Excel及び分析ソフトRを使用した統計解析とグラフ作成を教員とともに実施している。また、遺伝学ではヒトゲノム情報の取り扱いの倫理的側面について議論することや、土壌肥料学では地球環境問題の解決について農業分野でどのような貢献ができるかを討論するなどの事例がある。また、講義の内容として、農業科教員として必要な最新の専門知識を導入することにも心掛けている。例えば、授業時に大規模機械化畑作農業へのGPSやドローンなどの利用について先進的な事例を取り上げ概説するなど、先進的な農業事例を取り入れている。

○海洋水産学科

本学科では、1、2年次配当の実験科目において、グループワーク並びに実験結果に基づくディスカッションを取り入れ、理科教育における課題発見や課題解決等の力量を育成している。2年次配当の講義では、ディスカッション及びディベートを実施するなど理科における高い専門知識を持った教員の養成を意識している。また、2年次配当の水圏の環境情報学では、ICTを活用した実際の観測データの解析を実施、解析結果を用いたディスカッションにより、理科教育における課題発見や課題解決等の力量を育成している。

○食香粧化学科

本学科では、高度な専門知識を提供できる理科教員を育成するため、理科及び総合的な学習に対する効果的な指導力育成の土台となる学科科目により、全体カリキュラムを構成している。学科必修科目における講義及び実習では、論理的でクリティカルな思考育成を意識したレポート作成の継続的な指導を実施している。論理的でクリティカルな思考力が汎用できているかについては、教職科目の取り組み状況並びにレポート完成度において把

握するようになっている。

○自然資源経営学科

本学科では、社会科教員を育成することを念頭に置き、社会科指導に必要な基礎・応用科目をもってカリキュラムを編成している。必修科目をはじめとした講義では、論理的思考力を高めるため、レポートの作成やテストにおける論述問題の出題などを実施している。専門科目においては、PBL による知識の定着や応用力、思考力を高める取り組みや反転学習による能動的な学習の意義を理解に力を入れている。また、グループワーク、ディスカッション及びプレゼンテーションを積極的に取り入れ、学生の自主性、コミュニケーション能力及び表現力を高める取組を行なっている。

<根拠となる資料・データ等>

- 3-1-1 2022 年度学部・学科・課程紹介
- 3-1-2 履修カルテ
- 3-1-3 教職課程履修案内 2022

(2) 基準項目 3-2 実践的指導力養成と地域との連携

各学科では実践的指導力の養成として、学科専門科目知識から基礎的な知識を学習し、学生実験・実習、卒業論文を通じて教科に関する専門的な知識やスキルを習得させている。教職課程は学習指導案作成の指導を実施していること、地域の教育委員会と連携し、小中学校での教育ボランティアに係る協力体制を構築している。

<根拠となる資料・データ等>

- 3-2-1 2022 年度学部・学科・課程紹介
- 3-2-2 免許状更新講習テキスト
- 3-3-3 教育ボランティア説明会資料

[長所・特色]

本学部では、学科毎の専門の知識や技術について、実験実習科目を通じて習得し、3年次からは研究室活動を通じてより高度な専門性を身につけている。また、教育ボランティア活動を通して、教育現場における実践力の養成にも力を入れている。近隣地域との連携として、網走市教育委員会と協働で小学生を対象とした学習サポート活動を年に数回実施し、地域の子どもの学力・コミュニケーション力を高めるための実践活動にも取り組んでいる。さらに地域の保護者を対象として、認知・非認知能力向上のためのプログラム実践検証成果について、教育フォーラムとして ZOOM も活用した情報提供活動を行っている。

[取り組み上の課題]

ICT 教育の実践的指導力と活用の強化が課題である。学校教育現場で ICT 教育の充実化が目指されていることを鑑み、ICT のスキルを身につけるにとどまらず、ICT を活用した効果的な授業の在り方、学校不応適や特別支援教育が必要な生徒への ICT の活用、校務・セ

キュリティへの活用などを含めた情報の力の向上を目指すこととその支援体制・環境の強化のため、一層、教育の充実を図る必要がある。学科の課題として、現状においてアクティブラーニング及びグループワーク等を取り入れている事例はまだ多くないため、教職課程に求められる「積極的にリーダーシップを発揮できる人材の育成」に対して、学生が主体的かつ積極的に参加するタイプの授業を取り入れる必要があること、教員として必要な知識、思考力および表現力が実際に学校現場で活かされているか?、「修得すべき必要な知識はあるか?」など教育現場からのフィードバックを踏まえたカリキュラム編成を検討すべきであるとの課題が挙げられる。

Ⅲ 「教職課程自己点検評価報告書」作成のプロセス

本学教職課程の全学的組織である教職・学術情報課程委員会において、自己点検評価の実施及び報告書作成までの手順・スケジュールを検討し、以下の作成プロセスを策定した。なお、本プロセスは、大学設置基準に基づく全学自己点検評価委員会とも情報共有し、常に点検及び見直しを行う。

第1プロセス（令和4年5月）

教職・学術情報課程委員会による自己点検評価の実施内容等の決定



第2プロセス（令和4年6月）

教職課程、担当事務所管（教務課・学生教務課）による法令由来事項の点検等の実施



第3プロセス（令和4年6月）

学部教職課程委員会と学科による自己点検・評価の手順等の確認



第4プロセス（令和4年7月～11月）

自己点検評価の実施



第5プロセス（令和4年12月）

教職・学術情報課程委員会による自己点検・評価報告書の承認



第6プロセス（令和5年2月）

自己点検評価報告書の公表



第7プロセス（令和5年3月）

自己点検評価報告書によるアクション・プランへの反映

IV 現状基礎データ票

令和4年5月1日現在

設置者：学校法人東京農業大学					
大学・学部名称：東京農業大学・生物産業学部					
学科の名称：北方圏農学科、海洋水産学科、食香粧化学科、自然資源経営学科					
1 卒業者数、教員免許取得者数、教員採用者数等					
① 昨年度卒業者数					332 人
② ①のうち、就職者数 (企業、公務員等を含む)					269 人
③ ①のうち、教員免許取得者の実数 (複数免許取得者も1と数える)					28 人
④ ②のうち、教職に就いた者の数 (正規採用＋臨時的任用の合計数)					5 人
④のうち、正規採用者数					4 人
④のうち、臨時的任用者数					1 人
2 教員組織					
職階	教授	准教授	講師	助教	その他 ()
教員数	34 人	13 人	0 人	12 人	